

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1971600174	
法人名	有限会社長沼工業所	
事業所名	グループホームふうりん	
所在地	山梨県南アルプス市飯野2300-1	
自己評価作成日	令和3年1月8日	評価結果市町村受理日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.mhlw.go.jp/19/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	山梨県社会福祉協議会
所在地	甲府市北新1-2-12
聞き取り調査日	令和3年2月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者さんの出来ることと出来ないことを見極め、持てる力が発揮できる援助、すなわち安易に手を貸さない「待つ介護」に取り組んでいます。また機能低下を防ぐための運動やリハビリの実施も重要と考え、「最後まで自分の足でトイレに行く」ということを最重要項目ととらえています。利用者さんの行動や気持ちに良くない変化が見られた時には、利用者さんの問題行動とせず、介護者や環境に問題がなかったかを考えるようにしています。夜間以外は自由に出入られる玄関から日常的に庭に出て、毎日の日課である戸外への散歩やドライブなどを楽しみ季節を五感で感じていただきながら過ごしていただいています。職員は「自分や自分の親が受けたくない介護は利用者さんに対してしない」をモットーに心からの介護を実践しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、果樹園に囲まれた一角にある木造平屋建ての、富士山が望める日当たりの良い環境にある。居室や玄関から自由に出入りができるため、庭に出て歩行訓練用のブロックの上を歩いたり、ベンチに掛けて自由に過ごしている。日常、リハビリをしたり散歩をして、自分の力で歩く事を大切に、認知症であっても、地域住民の一員として、安心して暮らし続けられるように、施設長始め管理者・職員は取り組んでいる。事業所内、居室は、常に清潔にコロナ対策がされており、家族から安心してお願いできると感謝されている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている 現状は(参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに(コロナ禍以前) 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている 現状は(参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が(コロナ禍以前) 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

事業所名: **グループホームふうりん**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	管理者と職員は理念の意味を深く理解し、全職員が参加して行われている毎月のサービス検討会議の際には理念に基づいていること、利用者さんのための最善の支援方法であるかを全員で確認しながらの話し合いを行い、毎月の目標を決めるなどして実践につなげている。	事業所の理念である「利用者さんに対してはその方に合った機能訓練の提供」を玄関に掲示している。管理者、職員は「利用者主体」を大切に、引継ぎ時、毎月のサービス検討会議では、2時間掛けて利用者一人ひとりのケアサービスについて、振り返りながら検討を行い評価をして次につなげている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入。地域のお祭りや行事などの情報提供をしてくれる。地域の防災訓練にも参加。季節の果物や野菜、清拭布などをいただいたり日頃の散歩中にも声を掛けていただいている。愛育会からは定期的にボランティアの申し入れがあり、散歩の付き添いやレクリエーションなどをしてくれている。	自治会に加入し地域の情報を得ている。例年では、地域の愛育会事業として、清拭用の古布を持って訪問していたが、今年度は、コロナ禍であるため、会員が個人的に届け交流をしている。また、季節になると近所から柿をもらい、利用者が干し柿を作ったり、散歩の際には挨拶を交わし近隣の人達と触れ合う機会が多い。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の場や来訪の際、また折に触れて紹介している。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所の様子を知っていただくためにも日中と夕方の時間帯を交互に開催することを目標として開催。書面開催も取り入れた。利用者さんの様子をご覧頂きながらサービス内容や活動の報告を行い、参加することが楽しみとなるよう様々な体験などもしていただいている。意見や助言をいただいた場合はそれを取り入れたり参考にしたりして、その結果を後日伝えている。	運営推進会議では、利用者の様子や活動報告をしている。コロナ禍であるが『面会をしたい』との意見があり、オンライン形式で対応をした。また、洋服等を届ける際に、利用者や玄関で会える様に工夫して、意見を具体的に活かしている。書面開催を取り入れ、出された意見はサービス向上に活かしている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	機関紙の配布、運営推進会議への出席依頼などを通して事業所内の状況や取り組みの内容を詳細に伝えており、協力関係を築くようしている。毎月月末に事業所の空き状況や待機状況の報告し、市役所担当者から問い合わせがあった際には真摯な対応を心掛けている。	事業所内の状況やケアサービスの取り組みを折に触れて伝えまた、外部評価の報告を郵送している。事業所の利用状況の報告や認知症ケアの実態を知ってもらうように空き状況や待機状況の報告をして、お互いに協力関係を築くよう取り組んでいる。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化の指針を整備し、研修も行っている。全職員が身体拘束の具体的な行為とその弊害を理解して身体拘束のないケアに取り組んでいる。開所以来、玄関も夜間以外は施錠していないため、自由に出入りできる環境にある。言葉による拘束もないよう注意し、不適切な言葉があった時は職員同士がその場で指導するようにしている。	身体拘束については、2か月に1回全職員が研修を行っている。言葉かけは、利用者一人ひとりの状況によって、その都度対応をしている。スピーチロックに関しては、職員同士がさりげなく注意できる環境にある。研修の際には、振り返り確認をしている。家族には、リスクに関する説明をし、マニュアルは玄関に掲示し周知している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	会議時などに虐待防止について参考資料なども用いながら理解を深めている。虐待がないよう全職員が取り組んでおり、万が一気になったことがあった場合には職員同士で注意を払うよう決めている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	過去、現在と制度を利用する利用者さんがいないため職員の理解度は低いが、必要とされる場合に備え、折に触れて情報の共有をしている。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	書類だけでなく口頭でも内容ま説明を行い、充分納得した上で契約を交わしている。			

自己評価および外部評価結果

事業所名: **グループホームふうりん**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時などには要望、意見を遠慮なく言っていたり、職員側から働きかけているが、まずは言いやすい関係作りを心掛けている。所用で家族に電話をした時も問かけられるようにしている。目安箱等はないが言いやすい相手に話していただき運営に反映している。	日常的に電話やメールで連絡をし、何でも言えるように働き掛けている。日頃から意見・要望・苦情は少ない。ただ、家族からホームページに写真を載せる際には気を付けて欲しい、との意見があり、事業所では個人情報もあり掲載の際は、利用者が分からない様にしているが、得られた意見は、大切に受け止めて反映させている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者、施設長は日常的に現場におり、意見や提案、相談を随時聞いている。職員連絡ノートの利用、会議時の発言などで職員が自由に意見や要望を言える環境にある。勤務時間の変更や職員体制の見直し、物品購入希望など反映していることも多い。	施設長・管理者が常に身近にいて何でも言い易い環境にある。職員は、連絡ノートを利用して、日常の思いやケアについて、自由に意見を言え情報も共有している。利用者が過ごしやすい高反発マットレスへ変更、介護し易いベッド変更などの意見があり家族と話し合い、職員の気付きを運営に取り入れている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は個々の職員の努力、実績、悩み等を把握しており、可能な限り職場環境や条件の整備に努めて働きやすい環境を保てるよう、柔軟な対応を心掛けている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修等に順番で参加できる機会を設けている。研修後はレポート作成により研修の理解を深め、研修後の会議時には研修内容を発表し、参加できなかった職員も知識を共有している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	日常的に交流している。			
II 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	職員は現状を受け入れ、本人を知る努力をすることに徹し、不安なく暮らしていただけるようまずは優しい声掛けと対応にて信頼関係を築くよう努めている。言葉だけでなく表情や行動からもその方を理解する努力をしている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	求めていることを良く聞き、安心して任せいただけるよう信頼関係の構築に努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人に必要な支援を職員全員で探し、見極めている。本人にとってマイナスになってしまうような過剰介護とならないよう慎重な見極めを行っている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常の様々な家事、裁縫、畑仕事、各種作業、生き物の世話など、何をすることも職員は利用者さんと一緒にいき、その際の雑談等を通して喜怒哀楽を共にしている。			

自己評価および外部評価結果

事業所名: **グループホームふうりん**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	食事の介助をしてもらったり、一緒に散歩に出掛けてもらう、ご自宅で過ごす時間を作っていたくなどして一緒に支えていただいている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	相手方にはいつでも訪問していただいて構わない旨を伝え、以前暮らしていた場所や墓参り、よく行っていた場所などへも本人の希望があれば出掛け、それらの情報は職員間で共有している。家族の承諾があれば機関紙を馴染みの人や親戚などにも送り、現在の状況を知ってもらいながら関係が途絶えないようにしている。	家族や友人、近隣の方が何時でも訪問出来るように声掛けを行っている。米寿のお祝いや誕生日には、帰宅して家族と一緒に祝いをしている。家族の協力で、馴染みの美容院に行き交流をしている。また、入居前に住んでいた周辺をドライブをして、馴染みの場所や関係継続に努めている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者さん同士が仲良くしていること、助け合おうとしていることを否定せず見守っている。車椅子を押し合ったり、同じ歩調の人で手をつないで歩いてもらったりすることもある。利用者同士で部屋の行き来があったり隣の席同士で声を掛け合ったりしてお互いに支え合っている場面が見られる。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	関係者と連絡を取り合い、利用者さんだけでなく家族とも円滑な関係を保っている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いを引き出すような声掛けや関わりを日常的に行っており、言葉だけでなく表情や行動、言葉の端々から判断し、意向を把握しながら生活の支援をしている。知り得た内容は職員間で共有。また直接言いにくいこともあるかもしれないので、ご家族を通して意向を聞く機会も設けている。	電話やメールで家族と相談して、利用者の思いや意向の把握に努めている。日常的な関わりの中で、ドライブの車中で「美術館等に行って見たい」などの思いを伝えられる信頼関係を築いている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	普段の会話や生活の様子から生活歴などの情報収集を行い、職員間で情報の共有をしている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その方に合った生活リズムが送れるよう臨機応変に対応し、また職員間でも情報を共有、状態を把握して支援している。有する力に関しては一度の試みで判断せず、何度か試みるなどしてから判断し、支援方法につなげている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎日の引継ぎやミーティング、会議で出された職員からの意見やアイデア、家族からの要望などを計画作成担当者がとりまとめ介護計画に反映している。モニタリングは通常半年に一回となっているが、随時アセスメントを行い、必要があれば適宜計画の見直しもしている。	入居時に利用者・家族から意見、要望を聞き暫定プランを作成。その後、職員と協議し介護計画を作成している。見直しは6か月としているが、本人、家族からの要望や身体状況の変化が生じた場合には、モニタリングに基づいた介護計画を作成している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	身体面、精神面を含めた一日の様子や変化、異変、また職員が気付いたことなどを一人ひとりの記録シートか連絡ノートに記録し、全職員が把握できる体制を取っている。			

自己評価および外部評価結果

事業所名: **グループホームふうりん**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	開所以来、要望には常に柔軟に対応している。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の踊りのボランティア団体や愛育会の方々が協力してくれたり、近くの図書館や公園などにも頻繁に出掛けるなどしている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所以前のかかりつけ医を引き続き受診している方と協力医・専門医を受診している方がいるが受診時には日常の様子がわかる職員が同行して現状を伝え、トラブルがないよう努力している。受診結果は全職員で共有し、家族への診察結果報告や受診の相談、医療機関の変更の打診等家族との連絡窓口は施設長が行っている。	かかりつけ医に関しては、入居時に確認をし基本家族の対応となっている。受診時は、日常の様子が分かる書類を持参し、情報を共有している。事業所の協力医を希望の場合は、2か月に1回定期受診があり職員が同行し、受診結果を家族に報告をしている。地域に認知症の専門医があり受診出来る。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は在籍していないが、そのことが利用者さんにとってマイナスとならないよう、全職員が病院受診時に医師や看護師の話を良く聞き、疑問点を解決して不安材料を残さないようにしている。命を預る立場であるため、日頃から情報収集も怠らない。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	医療機関とよく話し合っており、信頼関係も構築できつつある。入院中は毎日職員が交代で病院へ出向くなどして、生活環境が変わった利用者さんが安心できるような支援をしている。早期退院については入院時から要望を出しており実現させている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	支援方針について入所時に説明し、理解を得ている。時期が到来した時には改めて話し合いの場を設け、事業所として出来ることや訪問看護の協力体制やご家族の泊まり込みの実践しており、死後は職員の手によって入浴や旅立ちの準備を整え、故人が好きだった歌を全員で歌って送り出している。管理者や施設長の泊まり込みもあり、職員の精神的負担の軽減も図っている。	入居時、重度化や終末期に事業所が対応できるケアについて説明をしている。重度化した場合は、協力医と逐次連絡を取り、家族と医師との話し合いも行われ家族のニーズを汲み取りながら支援をしている。管理者は、看取りについて研修し職員と共有している。看取り時は、家族・施設長・管理者職員が泊り、安心して納得した最後を迎えられるようにチームで取り組んでいる。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命講習等を職員が順番で受講している、日頃から起こり得る緊急事態とその対処方法を職員間で話し合っている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	研修の受講や避難訓練を実施している。ホールには緊急時の実践的なマニュアルを掲示し、有事の際の近隣住民の方の協力体制を確保してある。夜間の地震を想定した避難訓練も実施。訓練後に職員から出た意見には対応し、消防署への自動通報装置の設置も完了している。	例年、地域で行われる日程に合わせ、地震想定避難訓練を実施。夜間想定では、避難場所で利用者の見守りを近隣の方に依頼し、協力関係を築いている。昼時に予告なしで、火災想定避難訓練を実施し、どんな場面においても避難誘導ができる体制を整えている。避難訓練実施記録で次回に向けての課題としている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	対応、言葉づかいについては生活歴や職歴なども考慮して、それぞれの利用者さんごとに対応している。トイレや入浴の際には羞恥心に配慮し、日々職員間でも意識の徹底を行っている。また職員は入職時に守秘義務について誓約し、利用者さんの情報等が書かれた書類は事務所で管理している。	利用者一人ひとりの状況や気持ちを理解した声掛けや言葉遣をし、援助が必要な時でも、本人の気持ちを大切に、さりげないケアを心掛けている。入浴時の着替え・好きな飲み物など選んでもらうなど、自己決定しやすい言葉かけや事業所の方針である、「待つ介護」を行い、一人ひとりの尊厳ある姿を大切にしている。		

自己評価および外部評価結果

事業所名: **グループホームふうりん**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望が話しやすい、表現しやすい対応を心がけている。また本人の意思を尊重し、柔軟な対応に努めている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の都合によって利用者さんの気持ちや行動を制限することのないよう注意を払い、個々の利用者さんの意向を確認しながらの支援に努めている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みの洋服などが着られる支援をし、衣類の汚れや劣化にも注意を払っている。女性は折に触れてお化粧をすることもある。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	会話の中から得られた好みの情報を生かした献立づくりを職員が順番で行っている。一緒に買物に出掛けたり、調理や下準備、配膳、下膳なども一緒に行い、職員も同じテーブルで昼食を食べている。野菜を庭の畑で育てており、収穫等も楽しみのひとつである。外食や弁当を持った外出、行事食なども頻繁である。	日常の会話から好みを聞き献立を決めている。オーナー栽培の野菜で、利用者は食材の下ごしらえをしたり、里いもの茎から「いもがら」を干し調理している。弁当を持って公園に行く・外のテーブルで食事をし、楽しむ工夫をしている。行事食も季節に合わせて、月見の団子を利用者と作り、一連の作業を通じて、力を発揮する機会としている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	バランスの取れた献立作りを心がけ、美味しいと感じていただける味付け、食べやすい形態に配慮している。摂取した水分量は毎回計測し、一日の必要量を確実に摂取できるよう取り組んでいる。水分摂取が苦手な方にはトロミをつけたり寒天で作ったゼリーなどで対応している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口臭や誤嚥性肺炎にもつながるため、食後の菌磨き、口腔ケアを実施し、清潔が保たれるよう徹底している。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	事業所が決めた時間ではなく、本人の排泄パターンや排泄サインに応じてトイレ誘導をしている。各居室にトイレがあるため、いつでもトイレが使える、プライバシーも守られ、安心して排泄が出来ることが排泄の自立に繋がっている。食前の生野菜の提供や寒天ゼリーの提供でスムーズな排便となるようコントロールを行っている。	各居室にトイレがあり、利用者一人ひとりの行動や排泄パターンに応じて、トイレ誘導する事で進んでトイレに行くように見守っている。職員は、前誘導など声掛けには羞恥心や不安を感じさせないように配慮をしている。パット等の物品についても昼夜で調節し、一人ひとりについて常に見直しをしている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量の確保や把握、排便チェックシートの記入、服薬支援等で細かく管理対応をしている。湯水のほか、寒天ゼリーやORS、嗜好品なども取り入れ、水分量の確保やスムーズな排便のための支援は徹底している。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の手で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一日おき午後からの入浴が生活パターンになっているが毎日入浴が可能な環境。体調や気分を考慮して強制はせず、時間をずらしたり担当する職員を替えての対応なども行っている。湯温、時間も本人の好みに合わせ、湯上りの飲み物やゆず湯等の楽しみも取り入れている。	毎日入浴が出来る環境にあるが、利用状況としては、2日に1回が基本である。家族から利用者の入浴情報を得て「一番風呂が良い」「湯の温度」にも配慮して、個々の好み合った入浴支援を行ない、また、昌蒲湯・ゆず湯・入浴剤など工夫し、入浴を楽しむ事ができる支援をしている。		

自己評価および外部評価結果

事業所名: **グループホームふうりん**

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名()	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	いつでも自由に部屋に行って休息が取れる。体調のほか、前の晩の様子や年齢なども考慮して職員が休息を勧めたり、安心して休める声掛けなども実施している。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬の目的や副作用、用法を全職員が理解と把握をし、細心の注意を払って用意して配り、誤薬事故を防いでいる。服薬確認も行い、服用後に見られた変化なども記録している。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	炊事、洗濯、掃除、動物の世話、畑仕事、裁縫などその型に合った軽作業を声掛けにより気分良く行ってもらっている。強制もせず、出来の良さ悪さも問わない。散歩やドライブ、買物、行事、外食などを通して楽しさを感じていただけるよう職員が毎日企画して実践している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自由に庭に出られる環境であり、一年中ほぼ毎日門外へ散歩やドライブに出掛けている。気分転換のほか、歩く機会が増えるため、良い運動の機会にもなっている。日常会話から得られた意向も大事にし、新聞やテレビで紹介され興味を示していた場所などにも積極的に出掛けている。家族と一緒に外出を楽しんだり、近所の方から車椅子を押してくれることなどもある。	毎日地域を散歩して外気に触れ、地域の方と会う機会も多い。季節には、桜・コスモスの花見などで、外出を楽しめるように支援している。利用者は、居室にこもることが無いよう日常的に庭に出て、短時間でも外気に触れられる機会を作っている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	金銭管理は事務所で行っているが、いつでも自由に使うことが出来ることを話し、納得していただいている。個人的な買物の要望があれば預かっているお金を持って一緒に買物に出掛け、自分で選び、会計をしてもらおうこともある。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙や年賀状を出すなどの支援をしている。家族の了解を得ている方は自ら電話を掛けることもある。所用でかかってきた電話に出て話してもらうことなどもある。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下、ホール、居室前が全面サッシで日当たりも良好。庭に面しているため、利用者さんは外を眺めたり、自由に庭に出たりして季節の変化を感じ取れる。またホールや庭からは富士山も見える。室内の壁には似顔絵や制作物などを飾っているが、保育園のような雰囲気にならないよう配慮している。	玄関を入ると正面に事務所があり、広いホールへとつながっている。玄関横には、利用者が作った節分の鬼の面が飾ってある。ホールとキッチンが一体化し、調理の様子や匂いが生活感を感じる。トイレは各部屋にあり使いやすく、脱衣所も広く入浴が快適にできるようになっている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	仲間同士で会話を楽しめたり、一人で過ごしたり、自由に過ごしていただいている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の入り口にはポストと木製の表札が掲げられている。居室内には家族の写真、記念の品、仏壇、人形、馴染みの家具なども置かれ、自宅に使っていた寝具や家電製品などを持ち込んでいる方もいる。居室内は畳とフローアーが半々になっており、好きなように使ってもらっている。	居室は、畳とフローリングが半々になっており、自由にベッドなど配置されている。トイレ・洗面台もあり排泄時には、何時でも安心して使える。位牌・写真が飾られ、職員が用意してお茶、ご飯をあげて、自宅の生活と同じような環境づくりを支援している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者さんが歩く所にはすべて手すりが取り付けられている。居室内のトイレの手すりは利用者さんごとに取り付け場所が変えられている。説明書があれば自分で出来る方のために張り紙をしておくこともある。			